いつもあなたとともにいる　　**マタイ 28:16～20**

今日、5 月第二日曜日は「母の日」です。母に感謝を覚えると共に母をおいて下さった神様に感謝したいと思います。私も母はすでに召されていますが時々、母の思い出、ことばや声を思い出すことがあります。そして改めて、子供のころ「母はわたしとともにいた」という事実を再確認します。今日のマタイの福音書は主イエス・キリストのご生涯とお働きを、「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエル（神はわたしたちとともにおられる）と呼ばれる」（マタイ 1:23）という預言の言葉で始まり、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」という、主イエスご自身の言葉で閉じています。自分の母の場合はなつかしい思い出、記憶に過ぎませんが主イエスは今も、これから後も、永遠にあなたと共にいると約束してくださっているのです。私が熱心に主イエスを崇めている時も、試練の中で主イエスに思いが至らない時も、どんな時も主イエスは「いつもあなたとともにいる」と言ってくださいます。ともにいてくださる主がこの地上での歩みの最後に私に語ってくださったことばとして今日の箇所を見てゆきたいと思います。

１．キリストの命令

マタイ 28:18-20 は「大宣教命令」と呼ばれる箇所です。救いのみわざを成し遂げて天にお帰りになる主イエスが、弟子たちに宣教を託された、大切な言葉です。「宣教」と聞くと、私たちの多くは、それは「牧師や宣教師がすること」と考えてしまい、主イエスの宣教の命令を自分自身への言葉として受け取ることが少ないのではないでしょうか。確かに、この時、主イエスの宣教命令を直接聞いたのは、11 弟子たちです。しかし、後の聖書に出てくる初代教会では、ほとんどすべてのキリスト者が、立場や役割は違っても、宣教に携わりました。それは「世の終わりまであなたがたとともにいます」という言葉は「世の終わりまで」ですから現代を生きるこの私にも語り掛けておられるということです。ちなみに聖書には「伝道する」ということばは出てきません。「伝道者」ということばはあります。宣教ということばの中に「伝道」の働きも含まれているのです。実は伝道ということばは聖書から出たものではなく教会の歴史から言うと２００年ほど前に主にアメリカで伝道に重きを置いた集会を始めたころから来ています。ビリーグラハム大会なんか有名ですよね。

ところで主イエスは宣教の働きをバプテスマ（洗礼）を受けてから始められました。これは興味深いことと思われませんか？　主イエスはバプテスマの特徴から言って受ける必要はありません。なぜならバプテスマは罪の赦し、罪からの清めという意味がありますが主イエスは罪を犯しておられませんから不必要なことです。しかし主イエスは受けて下さいました。それは私たちのために受けて下さったのです。キリストを信じる者が次に進むべき段階の模範として受けて下さいました。洗礼は確かにキリストの十字架によって罪赦され、古い自分が死に、そしてキリストの復活によって永遠のいのちをいただいた者として生きることを公にすることです。同時にその時点が主イエスと共に福音宣教への出発点ともなるのです。ですからバプテスマは信仰者のゴールではなくスタートと言えるのです。

主イエスは、マタイ 28:20 で「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」と言われました。これは、宣教の命令が使徒たちや初代の教会だけでなく、主イエスの再臨まで続く、あらゆる時代の教会、すべてのキリスト者に与えられている命令だということを意味しています。ですから「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」の中にある「あなたがた」という言葉には私も含まれているのです。主イエスの宣教の命令を、自分への命令として聞く、お互いでありたいと思います。

２．キリストの指示

マタイ 28:18-20 は「宣教の命令」ばかりでなく、「宣教とは何か」「どのようにして宣教するのか」ということも教えています。主イエスは、後の時代の教会が、「宣教」を勝手に定義づけたり、好きなよう

に変えてしまうことがないように、宣教の指示を与えておられます。主イエスは「宣教」の目標は「人々をキリストの弟子とする」ことであると定められました。「行って…」、「バプテスマを授け…」、「教え…」というのもそれぞれ大切な意味があるのですがもっとも重要なことばは「弟子とせよ」です。弟子とはもちろんキリストの弟子です。そして弟子となるとは人がキリストに従う者、キリストに倣う者になるということです。

主イエスは、「人々を弟子としなさい」と命じられた時、「行って…」、「バプテスマを授け…」、「教え…」と言われました。この三つは、人々をキリストの弟子とするための方法や段階を示しています。

「行って…」は、「人とつながりを持つ段階」です。まだ神の存在を知らないでいる人たちに神を証しすること、イエス・キリストを知らない人々に、イエス・キリストのご生涯と教え、十字架と復活を伝えること、聖書を学んだことのない人たちと共に聖書を学ぶこと、礼拝や祈りを体験したことのない人たちを礼拝や祈りに招くことなどです。

「バプテスマを授け…」は、「導きの段階」です。バプテスマそのものだけでなく、聖書を学び始め、礼拝に集い始めた人たちがバプテスマを受けたいという願いに導かれるよう祈ること、イエス・キリストを救い主として信じ、主として従い、キリストのからだである教会の一員として生きる生活へと導くことなどが含まれます。

「教え…」は「成長の段階」です。バプテスマを受けた人たちが、教会につながり、みことばを学び、キリストの弟子として成長していくのです。「弟子」という言葉には「学び、従う者」という意味があります。「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」と言われているところで、「守る」と訳されている言葉には「注目する」、「大切に保つ」、「服従する」などという意味があります。教会は「人々を弟子とする」ために、さまざまな教育や訓練の機会を持ってきました。私たちが神の言葉を学ぶのは、それを「なるほど、なるほど」と頭に蓄え、好奇心を満たすためではなく、それを信じ、それに従うためです。神の言葉には十分に理解できないもの、また、受け入れ難いものも多くあります。それでも聖書全体はキリストの十字架による救いと復活による永遠のいのちが信仰によって与えられるという神の国の福音を中核あるいは軸として成り立っていることを受け入れ、それに従う、そんな信仰を養うために、私たちは神の言葉を学んでいるのです。

ローマ人への手紙に「信仰の従順」という言葉があります（ローマ 1:15、16:25）。信仰とは、真理に対して従順であるということです。使徒パウロは「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい」（ピリピ 2:12）と勧め、使徒ペテロも「従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、あなたがたを召してくださった聖なるお方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい」（ペテロ第一 1:14,15）と教えています。

宣教するとは先にバプテスマの恵みにあずかった者、つまり私たちが、何よりも教えられやすい者、真理に対して従順な者、つまりキリストの弟子になることによって、他の人々をキリストの弟子にし、キリストの宣教の命令に従わせることができるということです。

３．キリストの約束

主イエスは、弟子たちに宣教の命令と何をしたら良いのかと指示をお与えになりました。しかし、最初の弟子たちは、宣教が始まった途端、ユダヤの最高議会から「イエスの名によって語ってはならない」という脅迫を受け、ユダヤ社会から追放されました。とても、宣教の命令を守り、宣教の指示に従うことができるような状況ではありませんでした。これは現在とは比べものにならないくらい大変な状況です。しかし、そんな中で、福音はローマ帝国ばかりでなく、アフリカ、インド、アジアまで伝えられ、各地に教会が建てられました。どうして、そんなことができたのでしょうか。それは、主イエスが、宣教の命令や

指示だけでなく、その命令に従い、その指示を実行できる力を弟子たちに約束なさったからです。

主イエスは、いきなり「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」といわれたのではなく、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」と言っておられます。また、「そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」と言われてから「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」と念を押しておられます。「それゆえ」と「見よ。」に注目です。宣教の命令と指示は、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」という主イエスの「権威」の宣言と「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」という主イエスの「臨在」（ともにいてくださる）という約束に挟まれ、支えられているのです。すべての力と権威が与えられている「わたし」が言うのだから心配しなくて良いのです。そして「見よ。」つまりしっかりと覚えておきなさい、この「わたし」がいつまでもともにいるということを！と主は言われるのです。

初代の弟子たちは、まず、このキリストの権威に服従しました。そうすることによって、キリストの権威がこの世のどんな力にも勝るものであることを身をもって体験しました。また、どんな時にも、キリストにつながり、キリストに留まりました。それによって、キリストがいつも自分たちと共におられることを体験しました。キリストの権威と臨在を体験し、そこから来る力と喜びを体験したのです。どんな苦しみの中でも、キリストは祈りを聞いてくださり、みことばによってそのおこころを教えてくださる。この世のものは奪われても、神の国と永遠の命が約束されている。初代のクリスチャンは、キリストの弟子であることが、どんなに素晴らしい特権であるかを知っていました。キリストの弟子であることに喜びを見出していました。ですから、他の人にもキリストの弟子になるようにと、心から勧めることができたのです。現代の私たちも、主イエスの権威から来る力とその臨在から来る喜びを必要としています。それを体験するためには初代の弟子たちのようにキリストの権威に服従し、どんな時もキリストに留まって臨在を体験することが必要です。キリストに従う気が無い、何かあるとキリスト以外のものに頼ろうとする。それでいて神様のみわざを味合わせてください、見せてくださいというのはどうかなと思うのですがいかがでしょうか？

教会は二千年前とは比べものにならないくらい全世界に広がりました。組織も、経済力も持つようになり、教育も進みました。かつては宣教地に行くのに何ヶ月もかかりましたが、今はどこにでも数日の間に行くことができます。インターネットの時代になって、瞬時に情報を共有できるようになりました。聖書はほとんどすべての言葉に翻訳され、出版されています。聖句の探し方も変わりました。聖書のページのめくり方がちがいます。私たちは、今までのどの時代よりも、宣教・伝道のための多くの機会を与えられています。しかし、それで宣教が進んでいるわけではありません。宣教・伝道の本当の力は主イエスの権威と臨在にあります。現代の教会は、他のさまざまなものを持つようになりましたが、一番大切な主イエスの権威を信じ、それに従うこと、また、主イエスの臨在を求め、その中に生きることを忘れているのかもしれません。この主イエスと共にあるとき、私たちも、主イエスの宣教の命令に応えることができる者となるのです。この時代、宣教に励み、ともにいてくださる神の恵みをより深く味わわせていただきましょう。祈ります。